



→ 知足院中禅寺の名跡を継いだ現在の筑波山大御堂。



←
男体・女体の双峰を御神体として、南腹に鎮座する筑波山神社。古来から多くの詩歌に詠われ、伝説に彩られた地です。

校歌に謳われた「筑波山」(その2)

関東平野の真ん中に屹立し、「関八州の重鎮」と謳われる筑波山。江戸時代には、その中腹にあり、輪奐の美を誇った知足院中禅寺に、徳川光圀(水戸黄門)・高野長英・吉田松陰などの多くの歴史上の人物も参詣しました。また、幕末の天狗党事件の舞台ともなりました。現在の筑波山は、水郷筑波国定公園の指定を受けたり、温泉(双神の湯)開発にも成功したりして、観光客・ハイキング客で賑わっています。この筑波山の歴史等について、今号も、前号に続き、述べてみたいと思います。

江戸時代の筑波山

万葉の世から歌に詠われてきた筑波山。古くから関東地方の人間にとっては特別な存在であり続け、それが江戸時代になると、徳川氏の信仰と、平和な時代の到来による人々の信仰心が、相まって一層身近な山になっていきます。

徳川家康は、江戸城に入ると、北東にそびえる筑波山が江戸城の鬼門にあたることから、使者を派遣して江戸城の安全鎮護を祈願したといわれます。さらに、天下を平定した後は、筑波山を徳川家の祈願所とし、知足院中禅寺に対して、寺領 500 石を安堵するなど、筑波山に対して優遇する政策をとります。

※ 鬼門：北東でうしとら(丑と寅の間)。陰陽道では、鬼が出入りする方角であるとして、万事に忌むべき方角としている。鬼門とは反対の、南西(ひつじさる)の方角を裏鬼門といい、これも忌み嫌われる。

由来は様々であるが、江戸時代には、鬼門の方角への造作・移徙(わたまし、貴人の引越)は忌むべきとされ、人々は鬼門の方角に桃の木を植えたり、鬼門の反対方角が申(さる)であることから、猿の像を鬼門避けとして祀ったりした。現在でも、家の中央から見て鬼門に当たる方角に門や蔵、水屋・便所・風呂などの水を扱う場所を置くことを忌む風習が残っている。また、かつての都市計画にあつては、平城京では鬼門の方角に東大寺が、裏鬼門は植槻八幡宮が、平安京では大内裏から鬼門の方角に比叡山延暦寺が、裏鬼門の方角に石清水八幡宮が、鎌倉では幕府から鬼門の方角に荏柄天神が、裏鬼門に夷堂が、江戸では江戸城の鬼門に東叡山寛永寺が、裏鬼門に増上寺が、それぞれ置かれた。

その後、三代将軍家光の時には、幕府は中禅寺の社殿建築に着手します。資材の搬入のために、直線に近い新登山道まで切り開かせたほどに大規模な造営工事でありました。現在も当時の名残は筑波山神社への参道にある「神橋」とども、そのほかにも、筑波神社境内の日枝神社・春日神社・巖島神社・旭稲荷も家光の時代のものでいわれています。

こうした幕府の取り組みは、「筑波ブーム」を引きおこし、参拝者・登山者がにわかに増え、新しい参道沿いは、宿屋・土産屋・遊郭などで繁栄を極めたという事です。

また、仏教の修行場としても名高くなり、中腹一帯に日輪院・月輪院・華蔵院・大慈院などの僧坊ができ、僧侶も 300 人を越すほどになるなどの隆盛をみせることになるのです。さらに、中禅寺は坂東三十三方所の巡礼地のうち第二十五番札所となり、白装束の巡礼が、山を訪れました。その賑わいは目を見張るものがあつたと思われまます。

加えて、平和が続いた江戸期には、文芸活動も活発になります。かつて歌に詠われた筑波山は、俳句の世界でも格好の題材になっていきます。

俳句は室町時代に流行った連歌から分かれ、松尾芭蕉らによって大成された世界で最も短い文学です。

その芭蕉は、貞享 4 年(1687)年、鹿島神宮参拝の旅をして『鹿島紀行』なる紀行文を残していますが、旅の途中現在の千葉県船橋市近辺にさしかかった折、北方に筑波山をみて、「歌を詠まずにはいられないし、俳句を作らずには行き過ぎることが出来ない。まことに愛すべき山だ。」と書き残し、弟子服部嵐雪の「雪は中さず、まずむらさきのつくばかな」の句を引用して、筑波山の美しさを褒め称えました。これにより、筑波山はさらに有名になり、後世の俳人たちがこの句をまねて、筑波山を「むらさきの山」とよんだため、やがて「紫山」ないし「紫峰」の別名がつくことになったのです。

そのほか、芭蕉の弟子宝井其角も江戸の両国橋に立って、

あかつきの 筑波にたつや 寒念仏

との一句をつくっています。この頃は今と異なり空気が澄んでいて、江戸の町なからでも、雪の翌日の青空に浮かぶ純白の筑波山や早春の霞に浮かぶ紫の山が見え、江戸の人たちは俳句をそのまま体験することが出来たのです。

遠くからの筑波山では飽きたらず、実際山に登った俳人もあらわれます。芭蕉の弟子の桃隣は、元禄 10 (1697) 年、舟で霞ヶ浦から土浦を経て、筑波山に向かうのですが、土浦は桜の時期で、

土浦の花や手にとる 筑波山
筑波山の険しい登山道では

筑波ねや すべつてこけて 藤の花
の句を、それぞれつくっています。

さらに、与謝蕪村は寛保 2 (1742) 年から宝暦元(1751)年まで、結城や下館の友人の家を転々としていたのですが、筑波山や桜川に関する俳句を残しています。

ゆく年や あくた流るる 桜川
冬ざれや 木々敷うべき 筑波山
やや時代がさがって天明元(1781)年、句界の第一人者大島蓼太が、竜ヶ崎在住の弟子杉野翠兄に誘われ、筑波登山の旅に出ました。中腹の大御堂では、

中腹の大御堂では、

堂高し千手に浅りきり閑く

また、神に関わる場所では、女人禁制が普通でしたが、筑波山は女も登ることが可能だったところから、

オシの事もかけて頼むや 筑波山

さらに、下山道の「胎内くぐり」という大岩の抜け穴をくぐって、

下用を出てこそ思へ 母の恩

の句を残しています。

そして、文化・文政期(1804～1829)の小林一茶も、両国橋からの筑波山を、

春立つや 見古したれど 筑波山

そして、自宅の庭の垣根越しの筑波を、
スイセンや かきにゆい込む 筑波山
と、詠んでいます。

明治以降の筑波山

明治維新後の筑波山は、様子が大きく変化します。幕府が消滅してスポンサーがいなくなり、寺院の経済状況が激変したことは勿論ですが、明治維新政府の行った神仏分離令・神社制度の採用や神道優遇策が、人々の動きに大きく関わってくるのです。その中でとりわけ、「排仏毀釈」の動きは見逃すことができません。神仏分離令は単に神道と仏教の分離が目的で、仏教排斥を目的にしたものではなくたのですが、全国規模で神仏習合の禁止・仏像の神体としての使用禁止・神社から仏教的要素の払拭などに発展し、ついには祭神の決定・寺院の廃合・僧侶の神職への転向・仏像仏具の破壊などが行われ、大混乱に陥りました。

さらに、明治4年(1871)寺社領上地令が発せられ、境内を除き、寺や神社の領地が国に没収されることになり、それま

でに暴力的な破壊を被っていた寺が、経済的な基盤も失うことになり、一層困窮し、荒廃することになります。多くの寺院では、仏像等が破壊されましたが、さらに経済的な理由で仏像等を売りに出す例も多く見られるようになったのです。例えば、現在国宝に指定されている奈良の興福寺「五重塔」は、わずか25円で売りに出され、薪にされようとしていたそうです。また、安徳天皇陵と平家を祀る塚を境内に持ち、『耳なし芳一』の舞台としても知られる、山口県下関の阿弥陀寺も廃され、赤間神宮となり、現在に至っているのです。筑波山も例外ではなく、戸長らを中心とした住民によって知足院中禅寺が壊され、多くの仏具や仏画が焼却され、次いで、大御堂・三重塔・十一面観音像などが打ち壊されたのです。奈良時代末から続いた寺が、僅かの日数で破壊されてしまったと言えます。

このようにして、江戸時代は特に繁栄した筑波山も火の消えたようになってしまします。そうした中、寺を壊して神社だけになった筑波山では、山頂に本殿、山腹に拝殿を設置し、「本殿と拝殿の間はすべて境内である」とし、政府の朱印地没収を免れ、山全体が神社所有とすることで、氏子である筑波の住民はその後も恩恵を受けることに浴します。

中禅寺を破壊し、神社境内とすることで、山は確保されたものの、その代償として多数の参拝者を失うことになりました。それまでの参拝者は、千手観音のご利益が目当てでの登山者だったので、宿屋・茶屋なども登山客の減少に伴い、廃業に追い込まれることも多く、あれほど繁栄した筑波山もあつという間に寂

れてしまします。それでも、明治6年(1873)年には、江戸屋の主人が洋式旅館(当時の人たちは「オランダ屋敷」と呼んだという)を完成させたり、明治12(1879)年には戸長らが中心になって大御堂跡で「全国大博覧会」を開いたりして、集客のための努力が続けられました。これらは、物珍しさも手伝って一時的には登山客が増えました。しかし、すぐにまた、山は寂れる一方になってしまふのです。

そうした中、明治35(1902)年、筑波山頂に気象観測所「山階宮筑波山測候所」(明治44年、中央気象台付属筑波山観測所となる)が設置されました。その後も、大正7年に筑波鉄道の開業、大正10年に筑波山微動観測所(後、東大地震研究所筑波山支所)の開設、大正11年に中腹までの自動車道路の開通、大正12年に登山バスの運行開始、大正14年にケールカーの開通、さらに、昭和21年に山頂にNHK技術研究所自動中継所の開設、昭和27年に電々公社の筑波無線中継所の設置などが続き、信仰の山が、科学の山へと脱皮することになります。それに伴い、筑波への登山客も、かつてほどではないにしても、増加の傾向を示していくのです。特に、大正7(1918)年の筑波鉄道の開業は、筑波山にとって大きな出来事で、最盛期を迎えた昭和30年代後半からは、土浦駅・筑波駅間には急行列車も運行され、行楽シーズンには上野駅や日立駅から国鉄の客車列車が筑波駅まで乗り入れるほどの賑わいであつたといわれます。

しかし、その後、モータリゼーション化の進行などにより筑波鉄道の乗客は急減し、昭和62(1987)年に、国鉄分割

民営化と時を同じくして、筑波鉄道は廃止されたのです。その間、筑波山では、自家用車利用者のための道路の整備や駐車場の設置につとめ、ある程度の観光客は確保してきました。しかし、自動車の小回りの利く便利さゆえか、宿泊を伴う登山客の減少傾向に歯止めをかけるまでには至りませんでした。

このように、筑波山は様々な歴史をたどってきたのですが、1960年代からは、その南側山麓一帯で筑波研究学園都市としての開発が進み、昭和62(1987)年には筑波郡谷田部町・豊里町・大穂町・新治郡桜村が合併して、つくば市を誕生させました。そして、翌年に筑波町、平成14(2002)年に稲敷郡茎崎町が編入され、現在のつくば市になります。すると、その北端に位置する筑波山を中心とした観光再開の動きがにわかに活発化します。特に、平成17(2005)年の「首都圏新都市鉄道」いわゆる「つくばエクスプレス」の開業が、この動きに拍車をかけていきます。つくば市の中心部と東京都市心が45分で結ばれたことで、この利便性を生かしての観光振興に、地元住民が寄せる期待は大きいものであります。

つくば市では、社団法人つくば観光コンベンション協会を中心に観光事業を展開し、平成19年度は380万超の人が、筑波山を含めつくば市を訪れています。協会では、様々なイベントを開催するとともに、筑波山麓観光周遊バスの運行、筑波山ビジターセンター「自然のひろば」の運営(無料)、筑波山観光ガイドン(無料)の活動などを通じて、更なる観光客の誘致に力を入れているところと言えます。(了) (高21回卒 鈴木義人)